

## 都市と交通路の歴史地理学的研究

谷岡武雄

たとえば、伊勢の鈴鹿川右岸の洪積層台地を占める「国府町」附近は、いまだではその面影がほとんど失なわれているが、古代における地方行政センターとしての国府が置かれたところである。これは方八町のプランをとり、かなり都市的な施設をもつていたものらしい。ところで、同じ川の左岸に当り、広瀬野と呼ばれる段丘状の洪積層台地にも、多数の礎石や建物趾が分布し、発掘の際には「宿」字が焼かれた瓦さえ出土した遺跡が存在する。そのプランは、東北地方の胆沢城址にも似て、ほぼ方八町、外周の一部に土塁を残し、直交する道路の排列は整然として、ローカルな計画的都市の感がある。伊勢国府は、すでに明らかにされた。それでないとするれば、果してここを何に宛てるべきか。そこで著者は、この西方に鈴鹿関が設置されていたことに着目する。そうして種々なる資料を集積したうえで、この遺跡が、屯田兵的都市の性格が強い軍団（七八頁）の所在地であったと推定し、古代の関が、単に関所だけではなく、後背地として、軍団を擁していたことを指摘する。古代における交通路は、このような性格の関と国府とを大きい結節点とし、その中間に多数の宿駅を配置して、律令国家を支える地域的階層体制の骨ぐみを構成していた。

かしくてここに、律令的古代地域の関構造に関する一つのシナマができあがる。たとえば河内国にあつては、国府を中心とする半径三キロ圏内は、都心や副都心をもつ都市域であり、六キロ圏内がアーバンフリンジである（一四八頁）。この場合、交通路は、「沿線」を結ぶ各都市に共通した榮養分を配布伝達する役割を演じるし、沿線の各都市は、それぞれの土地から吸収した歴史的地理的土壌中に、これを注入することによつて、さまざまの地域的特徴を成長させて行く」（一六一頁）ものなのである。したがつて、このような関構造は、帝都を中心とする地域と、その周辺地域さらにバイオニアフリンジとは、性格のかなり異なるものとなる。ここに、地理学からアプローチする必要がある。

何という鮮やかな説明の手並みであろうか。

以上のごとき理論は、抽象的な思弁によつてではなく、精力的な実地調査の中から生まれた。著者は、多年に亘つて関・宿駅・国府・古道を訪ねて資料を集め、あるいは発掘作業に汗を流し、そのうえに立つて、右のような新しい結論に到着した。

ここでわれわれは、著者の研究態度ないしは理論のバックグラウンドをなすものが、いまままでに充分磨かれて来た考古学的素養や、近年とみに力を注いでいる現代都市の研究であることに注意したい。評者には及び難いこのような二つの素地のオーヴァラップがなければ、とうてい本書のごとき名品は誕生しえなかつたものと思われる。

イギリスにおいては、クロフフォードを代表とするフィールド考古学というのがある。これは、単なる遺物ではなく、先史より中世に至るまでの、地表および地下に存在する遺跡ならびにその集団を、

考察の対象となすものである。しかしながら、フィールド考古学の、つまり残存度の少ない古代の遺跡のみから、その時代における景観ならびに地域構造を明らかにすることができ得るであろうか。著者は、豊富な考古学的知識を有しながらも、あくまで地理学の立場を貫こうとする。したがって、本書において用いられた方法は、つぎのごとく、地理学の一部門としての歴史地理学の立場を鮮明にするものである。(1)地理的基礎を考慮した古文獻の解釈、(2)考古学的遺跡・遺物の検討、(3)地籍図・土地台帳に基づく土地割の分析、(4)小字名の拾集、(5)現地での観察、(6)後の時代の都市・交通路からの地理学的に可能な逆推、(7)都市・交通路に關係の薄い同時代的資料による補強(一〇—一二頁)が、すなわちそれである。しかもこれらの方法は、かえつて古文獻を唯一の手がかりとする歴史的研究の缺を補いうる場合が多い。とくに、史料の少ない圍府や軍團の実体に関して、これは大きい有用性を發揮するものといえよう。歴史地理学は、その性格において考古学的である。このことは、イギリスでは、ペアレソフォードが中世村落の復原に際して用いた方法に示されているし、さらにフランスにおいて、斯界の第一人者と目されるデオオン教授も、同様な見解を懐いている。しかしながら、歴史地理学は、考古学とは似ていても、同一ではない。著者が重点を置いている、現景観中からそこに残存する古代的景観を析出する方法、すなわち著者も直接その講筵に列せられたダービー教授が、歴史学と地理学との關係についてのエッセイにおいて、強調している方法は、全く地理学の側に残されているからである。一九五七—八年におけるイギリス留学は、著者が編み出した諸方法を、海外の水準で

検討するに當つて、もつともつごうのよい機会を与えた。著者は多忙の中に寸暇を割いて、かずかずのローマンタウンを実地に訪れ、あるときはコルチエスタターに残るローマンウォールに、遠い古代の面影をみ出し、あるときはカーレント市内の古い礎石に、いにしえの町割を探し求めた(付編第一章)。そうして、このようなヨーロッパ古代都市の研究にあたつても、従来日本において用いていた方法の妥当性が、強く確信されるに至つたにちがいない。著者の帰国後における疲れるところを知らない現地調査は、その自信に基づいているのである。

他方、ドイツ・フランスを始めとする欧米の学界においては、都市の圍構造、さらに諸都市を結節点とする地域の階層体制の研究が、最近とくに顯著な傾向となりつつある。個々の都市の特色を、他と切離して、単独で論ずる古いやり方は次第にかけをひそめ、それらと關係的な存在として理解しようとするものである。このような考え方を、現代都市の研究において充分に撰取した著者は、それを古代の場合に対して適用しようとする。時代が全く異なるものを、そのままの形で通用するとは、著者自身考えてはいないが、そういう方法論上の大胆な前進がなければ、歴史地理学的研究が、今後大いに發展するとは思えない。評者もこの着想に同意するものである。

前著『先史地域及び都市域の研究』において、著者の研究態度を方向づける二つの背景は、すでに顕現されていた。しかしながら、この二つが、完全に融合したかたちにおいて、具体化したものこそ、本書であるといえよう。これは逆に、今後のフィールド考古学を刺戟して、圍構造的な考え方の重要性を認識せしめるであろうし、ま

た現代都市の研究にあつても、歴史地理学的方法の有用性を、立証するものであらう。評者は、これらの点に、現在の学界の研究段階において、本書のもつ大きい役割をみいだす次第である。

さて、「わが国律令時代における地方都市及び交通路の歴史地理学的研究の一試論」なる副題をもつ本書は、「研究対象の地理的意義と研究の方法」を述べた序論、(一)「地方都市としての国府の歴史地理学の研究」、(二)「鈴鹿及び愛発関とそのヒンターランドに関する歴史地理学の研究」、(三)「小字名と地形の検討からする延喜式の諸駅及び交通路の歴史地理学の研究」、(四)「律令の古代の地域構造の問題」の四章からなる本論、(一)「イギリスにおけるローマンタウン(含ローマンロード)の歴史地理学的性格について」、(二)「中世において国司館の存在した歴史的都市の過去と現状」、(三)「古地誌、名所図会、紀行文等にみられる近畿の街道と集落について」の三章からなる付論によつて、構成されている。

序論において、著者は、地理学の歴史的研究法と歴史地理学とを一応区別し、歴史地理学を、「過去の地域に関する人文地理学」と定義する(五頁)。そして、過去の景観の残存が、「現実の地域構成体中に有する歴史地理的な意義」(三頁)を充分認識したのち、この「歴史時代にも共有する現景観分析の方法」(六頁)こそ、歴史地理学固有の研究法であると主張するのである。これは著者によつて、「歴史地理学における地域変遷史的方法」(七頁)と名付けられている。かつて、小牧実繁博士は、斯学では正叙的・歴史的方法と倒叙的・地理的方法とが区別されることを指摘したが、両者の

結び付きは、必ずしも明確ではなかつた。藤岡教授は、それを一歩進め、現景観の中から過去の諸時代に起源を有する諸構成要素を順次抽出し、それらを時間的順序に並べて、過去から現代へ到る道を示した。かくて、従来方法的曖昧さを多分に含んでいた歴史地理学が、今後の研究にとつて、ゆるぎない基礎を築くに至つた。ダービーも、現景観からの歴史的要素の析出を重んずるが、社会経済的色彩の濃い彼は、せいぜい中世的景観までにしか到達しえなかつた。それ以上の遡及は、とくに日本の場合、藤岡教授の独壇場といわねばならない。ただ純理論的にいえば、「古代人にも共有される地理的基礎」(六頁)なる概念は、「舞台と歴史」という禁句を思い起こさせるような誤解を生ずる恐れがあるものと思われる。

本論は、すべて著者のここ数年來のフィールドワークの結晶である。第一章の国府研究においては、まず文献をあさり、広域に亘つて関係地名を拾集し、しかるのち個々の国府について、地理的位置・地形との関係・内部形態・町割・諸施設等が、具体的に明らかにされている。国府が古代都市国家と共通した立地環境をもつこと(二七頁)、帝都との結び付きが第一であるため、国の中では偏心的位置を持つ場合があること(二八頁)、規模ならびに町割が全国必ずしも劃一的ではないこと、しかもそのプランが糸里制とはさほど密接な関係を有していなかつたこと(五三頁)等は、新しい注目すべき見解であらう。第二章は、古代の関とそのヒンターランドとのあり方につき、鈴鹿・愛発兩関を例にとつて論じたものである。発掘の結果は有益に生かされ、軍団の存在の実証、関の二重構造への着眼(一〇一頁)などは、学界に大きな話題を投じた。また、愛発関

と西近江路に關して、軍団維持のための水田（九七頁）とか、扇状面を用いる駅馬の放牧地（八八頁）とかに着目しているのは、地理学者ならではの感を一層深くする。第三章は、古代交通路について、考察の対象を、近畿および周辺地域に拡げたものである。古代の駅路については、すでに史学系の井上・芦田等諸氏により、多くの研究が積み重ねられているが、著者は全く新しい立場から、これらを改めて考察し直している。そこでは、現地での景観分析、駅間距離・微地形・関係する古地名等の検討が重視される。著者は、延喜式所収の駅を研究の手がかりとしたが、大化以後二世紀半に亘る間に、古いものがかなりの変化を蒙っていることが明らかとなつた。しかし、「地理学的研究は、地表における駅の分布復原の中にも、ある地域的特質や共通性の存在すること」（一三八頁）を教えているのである。なお、国府が、このようにして復原された駅路に、必ずしも沿うていない点は（一二六頁）、重要な意味をもつように思われる。ただ、著者は小字名をやや偏重する嫌があり、多数列挙された中の若干は、その必要がなかつたように考えられる。第四章の律令的古代の地域構造に関する研究は、本論の結びに當るが、その示唆に富む諸見解は、充分高く評価されてよい。この章において、藤岡教授は、みずからの創案になる諸方法が、具体的に適用された諸結果を綜合し、地理学としての歴史地理学のあり方を示した。その下す根は深く、その咲かせる花ははなはだ香りたかい。これはわれわれ後学にとつて、今後の研究上の指針として、大いに役立つであろう。

謙虚に付論とされた最後の三章は、本論の基盤が、かなり広いも

のであることを示している。第一章のイギリスにおけるローマンタウンおよびローマンロードに関する研究は、地域的個性の描出をめざす地理学にとつて、他地域との比較が、非常に重要であることを教えるものである。これは、日本に好意的ではなかつたイギリス滞在中、著者が、諸種の困難を排して実地調査を行った成果である。日本の律令的地方都市の多くが、いまは大部分廢墟の景観をなすのに対し、「ローマンタウンは、その後の中世といわず、現在にもなお往年の面影をとどめて残存するものが多い」（一一一頁）とする著者の体験は、われわれの驚きでさえある。ここに比較の重要さが、理解される。だが、このように残存の程度が異なつても、「歴史的アプローチは、イギリスや日本のような古い国ではきわめて必要である」（一八八頁）。第二章は、中世に北畠氏の国司館が設けられていた伊勢国多芸についての研究である。著者はここでも、過去の景観を復原したのち、それと現在とのつながりに説き及んでいる。第三章は、古地誌・名所図会・紀行文等から、近畿地方の古い街道と集落を考察したものである。かなり以前に、著者が古典的な紀行文からごく最近の五味康祐のものに至るまでを、いかにも楽しそうに読みあさり、そのあとを机上にうず高く積んでおられたことがある。当時評者は、その理由を質ねなかつたが、本章があらわれたいまとなつて、ようやくその意味が理解できた。著者の榮養分の摂取は、遺跡や古図など、通常の歴史地理学者が取扱う味気のない資料からは、限られていなかつた次第である。

評者は幸いにも休暇のため、藤岡教授を、ロンドンの止宿先に訪ねる機会があつた。その際教授は、ローマンタウンやローマンロー

ド研究のたのしみを語ったのち、一枚の紙片を評者に示された。そこに記された内容は、正確には記憶していないが、ほぼ本書の復案に当るようなものであつたと思う。ロンドン大学の雰囲気やイギリスにおける教授のフィールドワークは、大いに執筆意欲を刺戟したものであろう。帰国後、教授は従来の諸研究を整理し、さらに新しい調査結果をつけ加え、それらに一本の筋金を通された。かくして誕生したのが本書である。著者は帰国後人がかわつたのではないかと、よく噂されている。従来 of 忙しいそう な立居振舞いが忘れられ、静かにアームチェアに腰かけて、瞑想にふけておられる教授の姿を、みかける機会がしばしばである。はしがきに述べられてあることは、「地理学徒の幸福は、……地域にとりかこまれたアトモスフェアの感覚を科学的操作によつて、心行くばかりにわが身につけていることだと思つている」には、著者の最近における心境が洩らされているもののように思われる。本書のもつ高い研究史上の価値はいうまでもないが、この味わうべきことばこそ、わたくしがこの良書にひきつけられて、短評の筆をとつた大きい理由である。(A5判 二二五頁 図版七一葉 昭和三五年六月 大明堂刊 四二〇円)

### 執筆者紹介

- |       |           |
|-------|-----------|
| 酒井 一  | 京都大学大学院学生 |
| 佐々木隆爾 | 京都大学大学院学生 |
| 西村元佑  | 京都大学大学院学生 |
| 松浦道一  | 広島大学助教    |
| 曾我部静雄 | 東北大学教授    |
| 塩沢君夫  | 名古屋大学助教   |
| 合田祐作  | 朱雀高校教諭    |
| 谷岡武雄  | 立命館大学教授   |